

【ポスター発表】

## 福祉系大学生の障がい者に対する態度について —障がい者に対する理解を深める手がかりについて—

○ 金城大学 岡村 綾子 (003446)

キーワード：福祉系大学生，障がい者，理解

### 1. 研究目的

社会福祉系大学の学生は学年進行に伴い障がい者に対する理解が進み、障がい者に対する態度の変化もみられるようであった。そこで、障がい者に対する態度について調べた結果、障がい者に対する顕在的態度と非顕在的態度とは一致しなかった。一致しなかったのは、現行の制度あるいは教育のあり方などに文化的、慣習的な変数などが複雑に影響し合った複合的な事態が考えられた。そこで、非顕在的態度に及ぼす変数を抽出する必要があるため、その手始めとして、昨年度は障がい者と聞かれた場合の障がい者のイメージについて検討した。その結果、障がい者のイメージは、見てすぐ気づくことに強く影響されていると考えられた。そこで、今回は障がい者の障がいについて考える際に、障がい像が「見てすぐ気づく」ことに強く影響されていることと障がい者に対する態度との関連を明らかにし、障がい者に対する理解を深める手がかりについて考察することにした。

### 2. 研究の視点および方法

調査協力者 A福祉系大学の2016年度4年生156人を調査協力者とした。

調査内容 障がい者に対する読書の有無、障がい者に関するテレビ等の視聴の有無、一般的な問いかけによる障がい者に対する態度、障がい者と考える状態、初めて障がい者と関わった時期とその人が障がい者とわかった理由、地域の小・中学生に障がい者について説明する内容などとした。

調査手順と調査用紙の回収 年度初めのオリエンテーションの機会を利用して質問紙を配布し、自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙は156人に配布し、135人から回収できた（回収率 86.5%）。

### 3. 倫理的配慮

調査対象者には、研究の趣旨内容、得られたデータは研究目的以外には使用しないことについて事前に説明した上で調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。

### 4. 研究結果

障がい者と考えるのは、その人がどのようなことからかという質問に対して、107人が回答した。そのうち、「身体が不自由」「何か行動をするときに差し障りのある人」「いきなり大きな声を出したり、走り回ったりすること」など観察できる外見で説明した者は96

人で、約9割であった。この質問において、障がい者という記述を障がいをもつ人と健常者ではない人という2種類の記述で尋ねたが、どちらの記述で尋ねても約9割が外見的な説明で回答した。

他方、小・中学生に対して障がい者についてどのように説明するかという質問に対して回答した98人のうち、「世の中にはいろんな個性をもつ人がいて、その中で“障がい”という個性をもつ人もいらっしゃいます。でも個性があるだけで私たちと同じ普通の人間です。」というような観察できない非外見的である概念的な説明をしている者が39人、「身体が不自由だったり、コミュニケーションをとるのが難しかったりなどというようなことがあります。その人、その人で症状や程度も違います。」というような外見的な説明をしている者が28人、概念的および外見的な説明の両方で説明している者が30人であった。その他が1人であった。以上のように外見のみで説明した者は約3割であった。また、この質問においても、障がい者という記述を障がいをもつ人と健常者ではない人という2種類の記述で尋ねた。障がいをもつ人と記述して質問した場合は、回答した47人のうち、概念的な説明が21人、外見的な説明が8人、概念的および外見的な説明の両方が18人、健常者ではない人と記述して質問した場合は、回答した51人のうち、概念的な説明が18人、外見的な説明が20人、概念的および外見的な説明の両方が12人、いずれにも当てはまらないが1人であった。

## 5. 考察

質問された学生自身が障がい者の障がいについて考える場合は、約9割が観察可能な外見だけから障がい像を作り上げているのに対し、障がい者について学生が他者に対して説明を行うとなると、約7割の学生が概念的に障がい像を説明し、約3割が外見だけで説明している。さらに質問の記述に「障がい」という言葉を用いた場合は約2割(17.0%)、「障がい」を用いないで「健常でない」とした場合は約4割(39.2%)の学生が外見だけで説明している。9割以上の学生が中学生までの間に初めて障がい者と出会っており、その出会った人が障がい者とわかった理由として外見か、あるいは誰かに教えられたことを挙げている。しかし、説明相手が小・中学生であるので理解しやすい外見についての説明ではなく、概念的説明を行っている。これらのことから、「障がい」という言葉が説明者に敏感に影響して外見的説明を回避して概念的に説明しているように思われる。外見的説明が学生自身の非顕在的態度を直接的に反映するのではないかという思いから概念的説明を行っているようにも考えられる。これらの考察に加え、障がい者に対する態度について、学生自身が「障がいをもつ人を差別していると思う」と回答する一方で、小・中学生に対する障がい者についての説明では「差別をしてはいけない」「差別するのではなく」と顕在的態度のあらわれとみられる概念的な説明を行うと回答している。このことから、今回の調査でも障がい者に対する顕在的態度と非顕在的態度とが一致しないために障がいに対する理解を偏見なく深めることを難しくさせているのではないかと考えた。